

明治六年一月一日發兌

別15

21

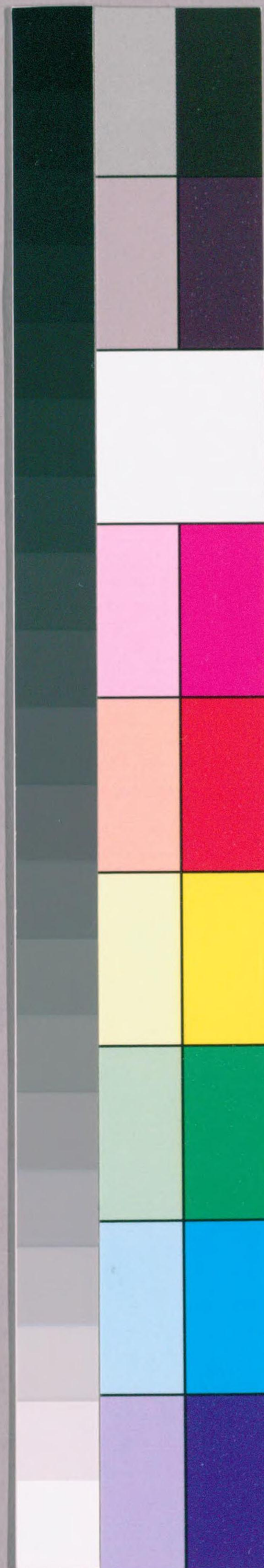
許官申

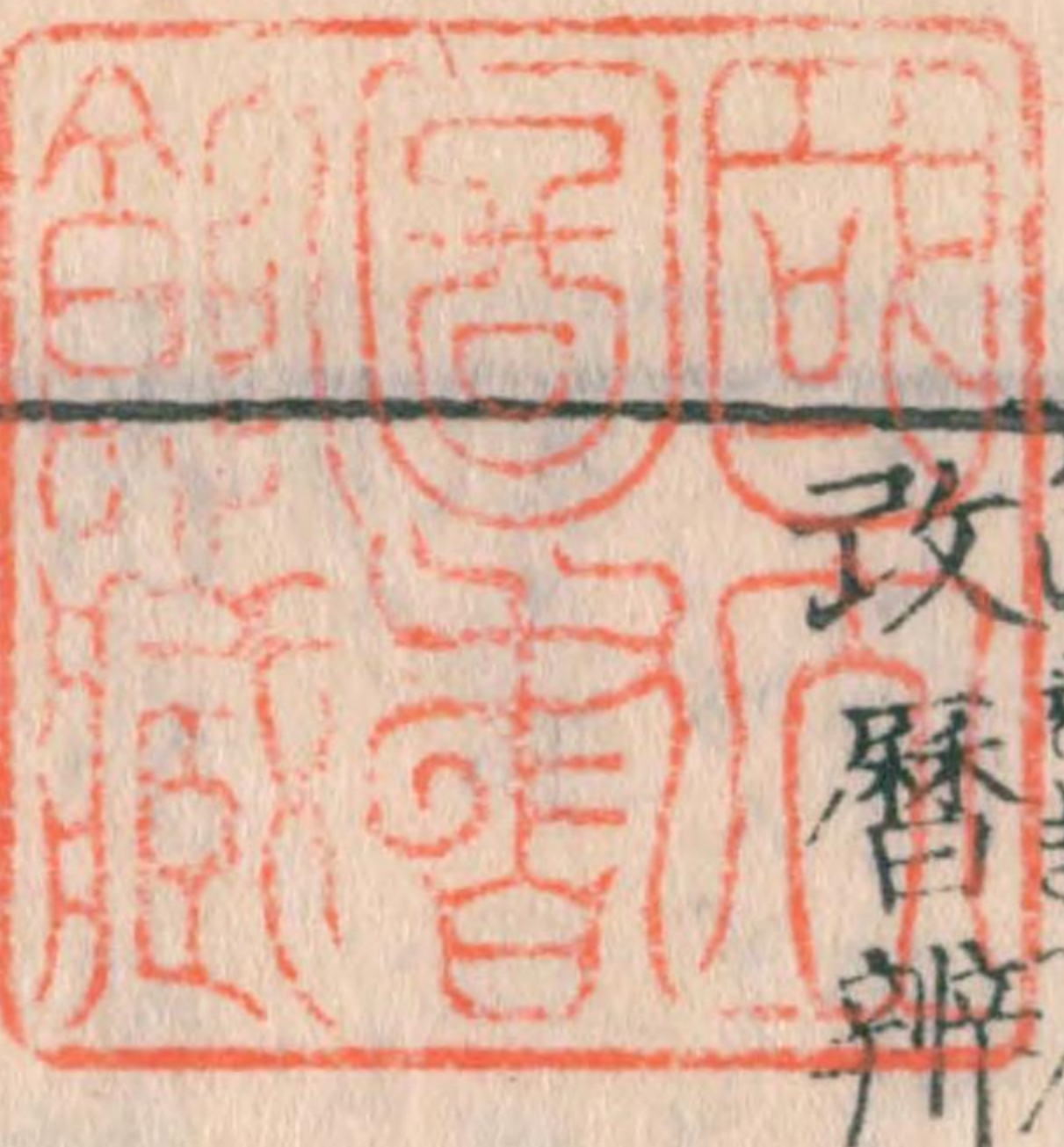
34

改曆辨

福澤諭吉著

愛應義塾藏版





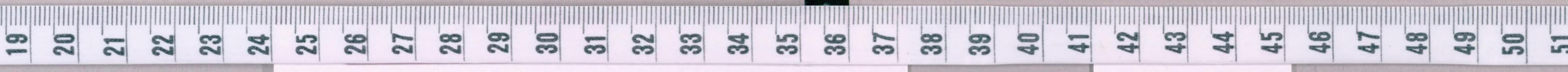
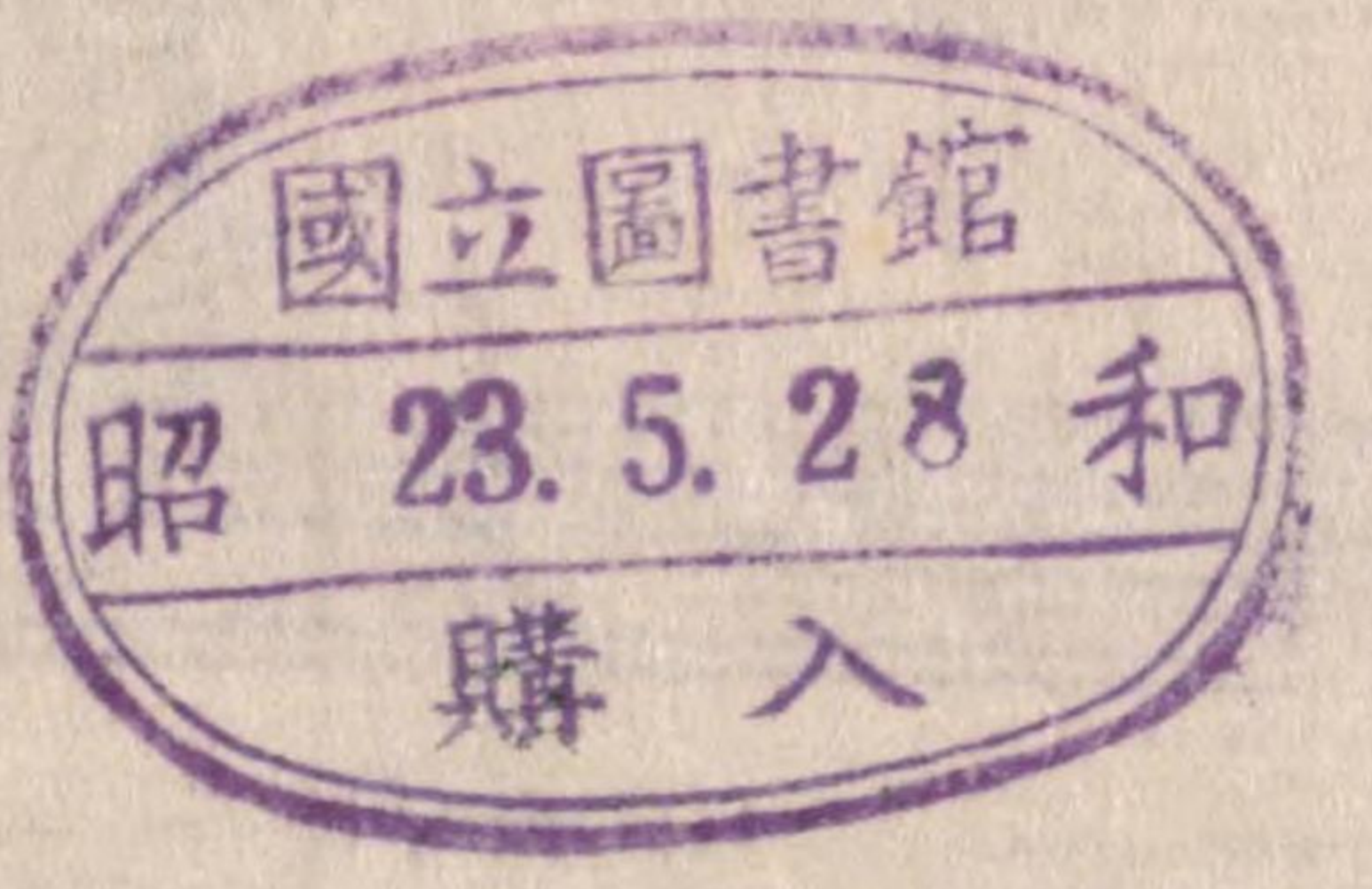
改曆辨

大陽曆と大陰曆との辨別

福澤諭吉 著

此度大陰曆を止て大陽曆とふ一明治五年十二
 月三日を明治六年一月一日と定めたるハ一年
 俄小二十七日の相違ふて在間よ其きを怪む者
 も多からんと思ひ西洋の書を調べて彼の國へ行
 たる大陽曆と古来支那日本等小用る大陰曆
 との相違を示すこと左の如し

超風疾



小六億里の道を走ることなり大陽替ハこの勘
定を本小一して日輪の周圍小地球の一廻する間
と一年と定めたるものなり然る小此一廻の間
丁度三百六十五日なりバ千年も万年も同ト曆
小て差支ふき答かきども六十五日の上端ハ六
時といふものなりて毎年六時づつ後ハ四年目
小ハ四ハ二十四時即ち一日の後とかり申ハ四
年目小ハ一日増して其間小地球を走らしめ丁
度本の裏小行付を待つなり即是閏年なり右の

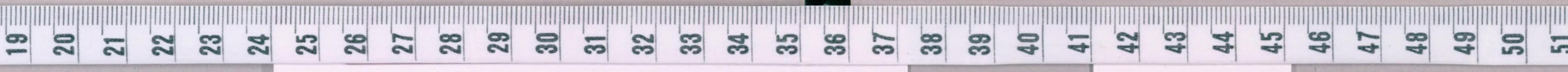
如く大陽替ハ日輪と地球とを照し合せて其互
小釣合ふ裏を以て一年の日数を定たるものなり
忽春夏秋冬寒暖の差毎年異なりことふく何月
何日といハ丁度去年の其日と同ト時候小て
種を蒔く小ち指を切る小も態々曆を出し小節
を見る小及小去去年の彼岸ハ三月の二十一日
なりハ今年の彼岸も丁度其日なり且毎年の日
數同様なりゆゑ一年と定めて約余したる事ハ
丁度一年の日數小て閏月の為ハ一箇月の損徳



何ること方一其外の便利ハ一々計へ擧る小及
 をざるまとなり唯此後ハ所謂晦日小月を見る
 こと何るべし數を知らざる無學の人ハ一時
 目を驚り其の不便何ん乎文盲人の不便ハ氣
 の毒ふぐら顧る小暇何れも其便不便ハ暫く閣
 き兎も角小日輪ハ本なり月ハ附ものなり附も
 のを當小せざし々本小由て曆を立るハ事柄小
 於て正しき道といふべし
 大陰曆八月を目當小して定たる曆の法なり月

ハ此地球の周圍を廻るもの小て其實ハ二十七
 日と八時小て一廻をまれども日と地球と月と
 の釣合小て丁度一廻して本の處小歸る小ハ二
 十九日と十三時なり大陰曆ハ毎月十五日の夜
 小圓き月を見る趣向なりまども右の二十九日と
 十三時を十二合せて十二箇月としてハ三百六
 十五日小足らざ即ち月ハ既十二度地球の周
 圍を廻りたまども地球ハ一日日輪の周圍を
 一廻せざるなり此差九二年半余小して一月計

四



なるゆゑ其時小至り閏月を置き十二月を一年
とふ地球の進で本の裏小行付を待たり又こ
をを譬へバつらま一三百六十五文拂ふべき借
金を毎月二十九文五分づゝの濟口小て十二箇
月拂へバ一年小九十一文づゝの不足つら十二
文づゝ二年半余ても滞らバ大抵三十文計りぬ
引負となるべし閏月ハ即ちこの三十文の引負
を一月小よとめて拂ふことゝ知るべし右の次
弟小て大陰曆ハ春夏秋冬の節小拍らと一年の

日數を定るものふれば去年の何月何日と今年
の其日とハ唯唱のと同様なるも四季の節ハ
必む相違せり故小入梅土用彼岸などして農業
の節ハ一々替を見ざまバ叫しぬとふかき
且又これらでの替小ハつらぬ吉凶を記し黒
日の白日のちて記もてかゝぬ日柄を定たまハ
在間小曆の廣く引る不ど迷の種を多く増し或
ハ婚禮の日限を延し或ハ轉宅の時を縮め或ハ
旅立の日小後きて河止小逢ふり或ハ暑中

五

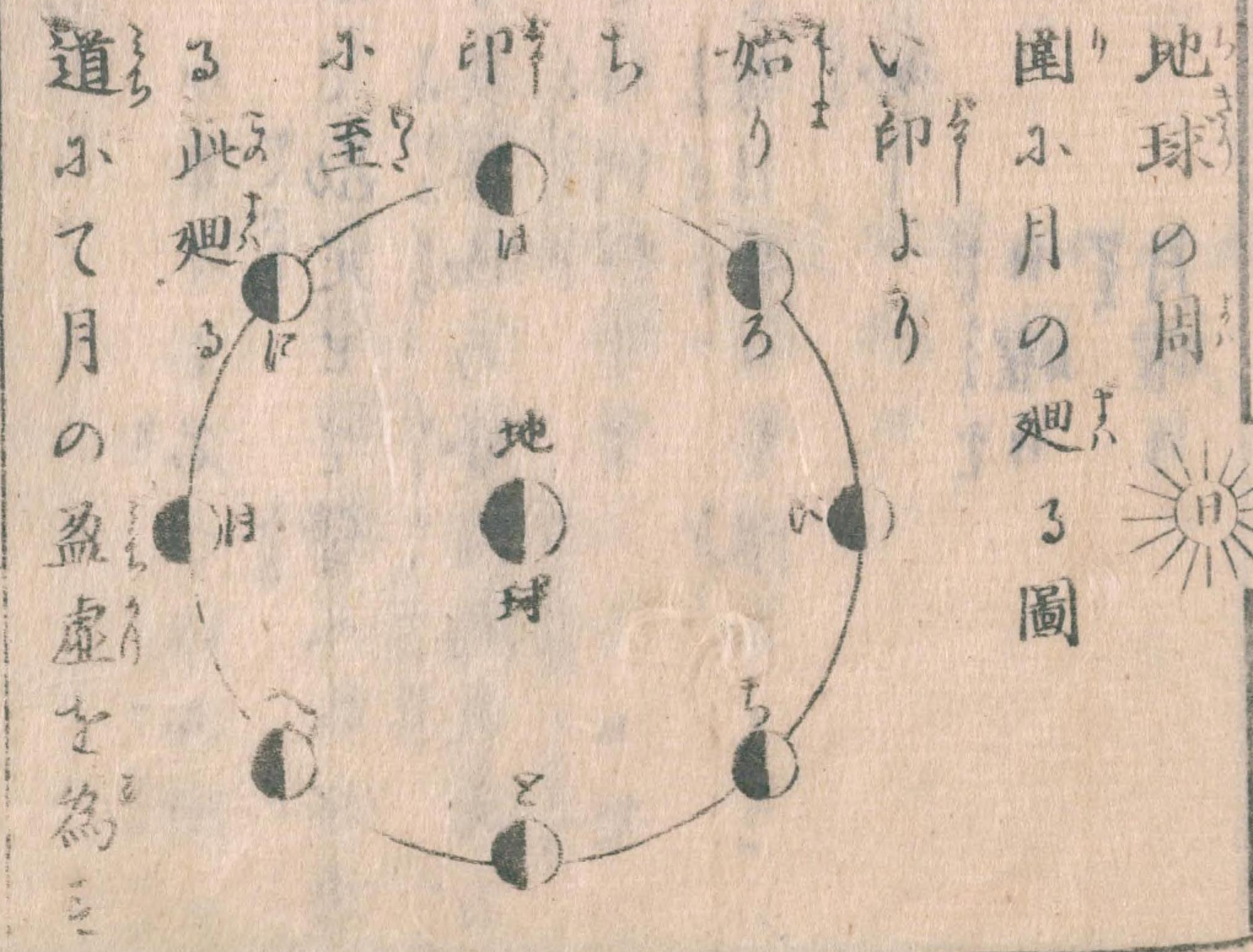
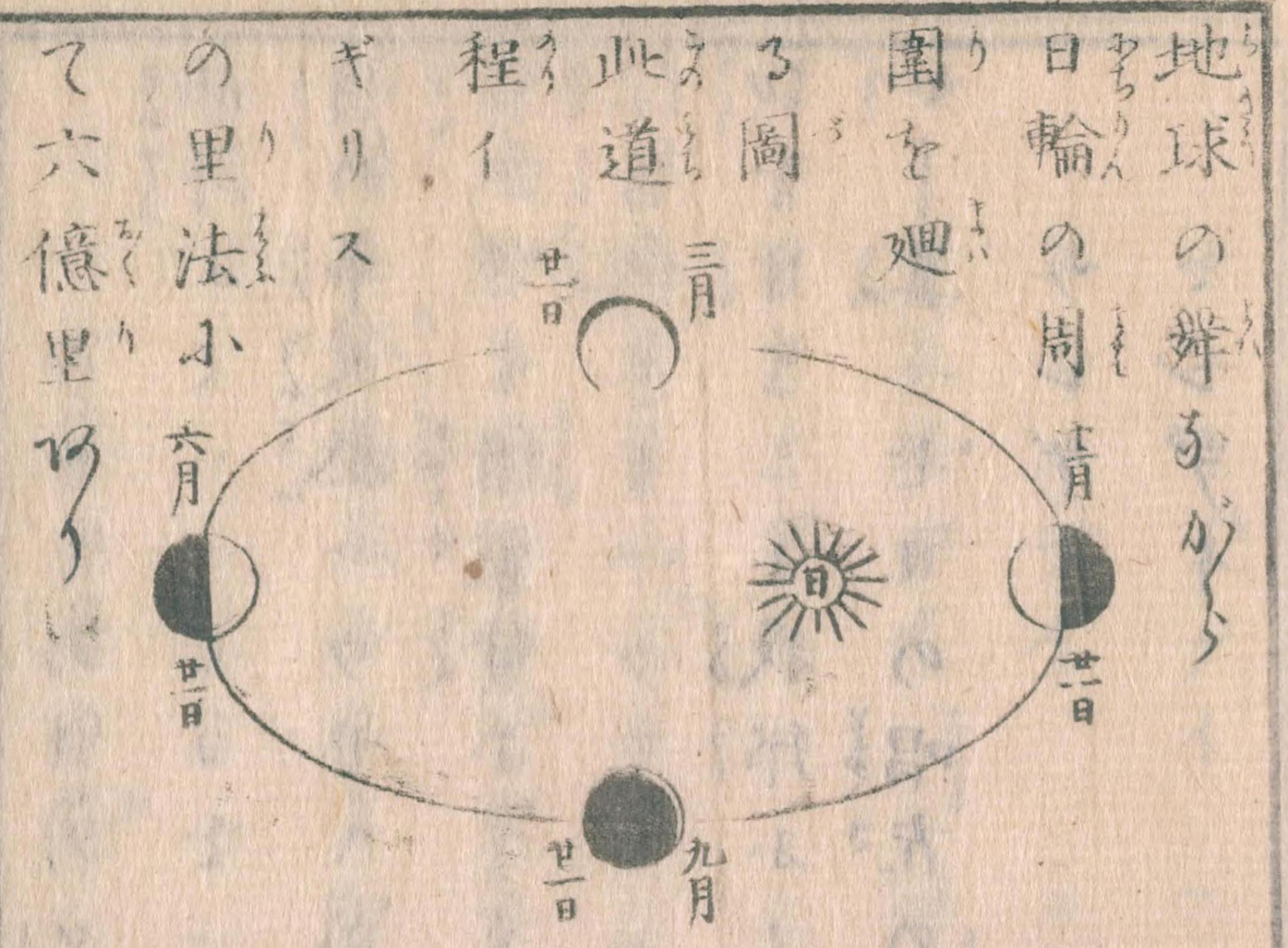


小葬禮の日を延して死人の腐敗をさしつゝ一
年と定めたる奉公人の給金八十二箇月の間
も十兩十三箇月の間小も十兩なりま一箇月
たゞ奉公をさるゝたゞ給金を拂ふゝ何事小も
方の損なり其外の不都合計る小違つゝ是皆
大陰曆の正しからざる恵なり
右の次第小て此度大陰曆を改めて大陽曆と爲
一俄小二十七日の差を起したまども少し怪
む小足らざる事實の損小もつゝを徳小もつゝ

千萬歳の後小至るゝで丑の便利を増したる小
是都て人たる者小常小物事小心を留め世小新
らゝき事の起るゝとつゝ何故つゝ斯る事
の出来ゝやとよく其本を詮索せざるゝかゝら
其本の由縁をさへ辨まゝ如何なる新奇なる事
小ても怪む小足らざるものなり此度の改曆小ても
其誤を知らむゝ十二月の三日が正月の元日
小ふるゝと計を以て夢中小こきを聞き夢中小
これを傳へかゝ実小驚くべき事なまども平生

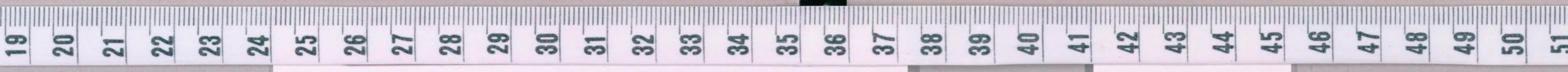


よりの人の讀むべき書物を讀む物事の道理を辨
 してよく其本を尋ねしむに不思議なる事小
 ならず故に日本國中の人民此改曆を怪む人ハ
 必も無學文盲の馬鹿者なり此を怪しむざる
 者ハ必も平生學問の心掛ける知者なりされバ
 此度の一条ハ日本國中の知者と馬鹿者とを區
 別する吟味の問題といふも可なり



ウヰキの日の名
 西洋の事大抵一ウヰキを一ウヰキと名づり、在間日
 用の事大抵一ウヰキを一ウヰキと名づり、在間日
 賃ふしも借家賃ふても其外物の賃借約束の日
 限皆何きも一ウヰキ小付何程とて一七日毎小
 切を付ること我邦にて毎月晦日を限ふること
 如し其一日の唱左の如し
 ヲンデー 日曜日
 マシデー 月曜日

チユウスデー 火曜日
 エンスデー 水曜日
 サアスデー 木曜日
 フライデー 金曜日
 サタデー 土曜日
 右の如く定てソンデーを休日ふて高賣も勤も
 何事も休息まることむ、一の我邦の元日の如
 一年の月の名



一年ハ十二小かち十二箇月とも其名と日の數
 尤の如く

月の名	日の數
ジャニユエリ	三十一日
ヘブリユエリ	二十八日
マアチ	三十一日
エプリル	三十日
メイ	三十一日
ジュン	三十日

ジュライ	七月	三十一日
アウグスト	八月	三十一日
セプテンバ	九月	三十日
ヲクトヲバ	十月	三十一日
ノベンバ	十一月	三十日
ガセンバ	十二月	三十一日

右の如く三月四月五月を春と六月七月八月を夏と九月十月十一月を秋と十二月一月二月を冬とさるなり



時計の見様

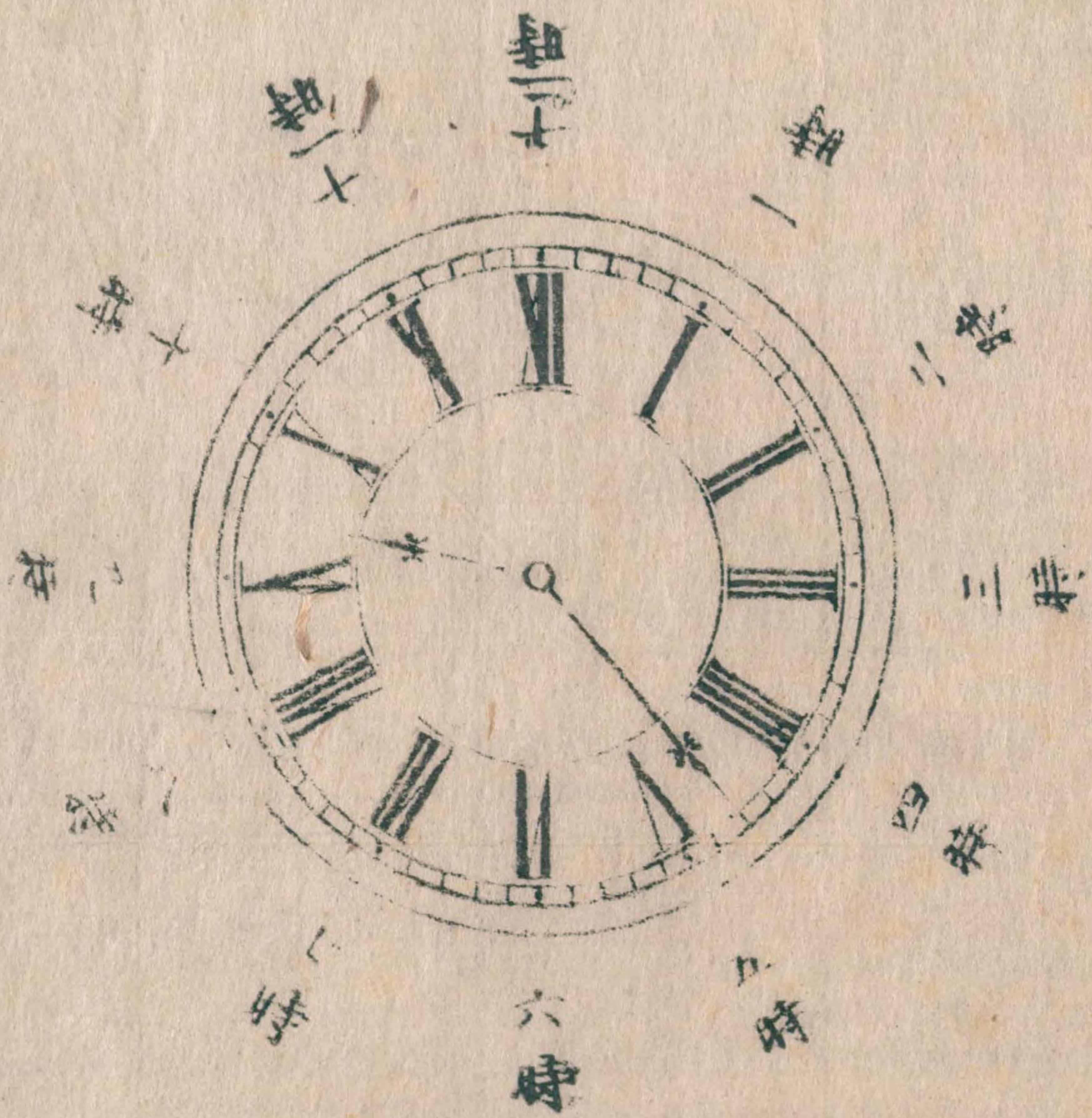
西洋小てハ一昼夜を二十四時小分つ也
一時ハ日本の旧半時小其半時を六十小分て
ふれを一分時(ミニウト)といふ亦この一分時を
六十小分て一セカンドと云ふ一セカンドハ大
抵脈の一動小同ト叔時計の盤面を十二小分ち
短針ハ一昼夜小二度づ廻り長針ハ二十四度
づ廻る仕裁よせを先づ正午又ハ夜半十二時
を本と一この時小ハ短針も長針も正しく重
を

合て十二時の所を指をこれより段々右の方
へ廻り短針の一時を指をこれより長針の盤面を
一周して六十分時を過ぎ又十二時の處小戻り
ふれより亦次第小進り短針の一時を五時との
間小来るよりハ長針も盤面を半小廻りて三十
分時を過ぎ丁度六時の所小来り故小時計を
見て時を知小先づ短針の指を所を見て次ぎ
小長針の居所を見るべし譬へハ短針の指を所
九時と十時との間小して長針の指を所二時の

十



時計の図



裏ふれば九時過ぎ十分時ふりと云ふことなり
 又此短針九時と十時との間を半過ぎて十時の
 方へ近寄り長針も進んで八時の所へ来きこれ
 を十時前二十分時と云ふ即ち其二十分時とハ
 長針の十二時の所へ至る迄二十分時なりと云
 ふことにて何れも長針八十二時を本小盤面
 小柄の六十の点を計へて何時何分時と云ふこ
 とを知るべし左小示の時計の圖は九時過ぎ二
 十分時の趣なり



12748

和、橋、八、圖



25

